

博士論文（要約）

死者と生者の声を紡ぐ金石範文学
——『鴉の死』から『火山島』まで——

趙 秀一

金石範文学は、大きく済州四・三事件をテーマにしている作品群、1945年8月15日をモチーフにした作品群、また在日朝鮮人の生き方を描く作品群に分けることができる。そして金石範はライフワークとも言われる『火山島』を完結した後も、小説にこだわり、書き続けている作家である。本論文では、金石範の初期作品が所収されている作品集『鴉の死』の五つの作品、そして『火山島』を作品論として成り立たせることを試みた。と同時に、金石範を日本の読者に知らしめた『万徳幽霊奇譚』、金石範文学の原点が窺える第三部の三つの作品を論じた。

まず、「序章」では、日本語によって保持されてきた4・3の記憶を、金石範がどのような「日本語」で描いているのか、そして死者と生者の声をいかに紡いでいるのか、その二点が本論文の目的であることを示した上で、「済州4・3事件」や金石範が書いた言語論について述べることで、「歴史性」と不可分の関係にある金石範文学を読む本論文の視座を提示した。

「第1部 金石範文学のはじまり—済州島三部作を読む」では、4・3事件を背景とする「看守朴書房」「鴉の死」「観徳亭」を分析した。

「看守朴書房」を論じた「第1章 歴史を現前させる物語」では、主人公の人物像と移動を語る言葉に日本帝国の植民地支配の歴史、「解放空間」の混沌たる政局の歴史、済州島の歴史が刻まれていることに注目した。そこから常に歴史と向き合い格闘することで、生み出された言葉の力を感じ取ることができる。本作のモチーフは密航者に語り継がれたある女囚の話である。「白い手拭」に「宋明順、二十二歳、涯月里と、村の名前を記し」、それを「太腿の奥深く肉が喰込む」まで縛って処刑を迎える無実の女性。また、「おらですな、どうも——大韓民国がしっくりしねえんでさ」と言い残し理不尽な死を迎えるしかなかった主人公の男性。それこそ4・3の悲惨さそのものを語っている。無名の死者一人ひとりを生者の記憶の方へ掬い上げる金石範の感性の力を読み取ることができる小説として位置付けることができる。

続いて「鴉の死」を考察した「第2章 死者を弔うことば」では、アジア漢字文化圏に共通する漢字やルビ、丸括弧、強引な受身表現などを多用し、日本語を異化させると同時に、物語世界の歴史性や潜在的な暴力性を浮き彫りにする特徴的な文体を明らかにした。そのような特徴は、他の章でも考察した通り、金石範文学の基底をなすものである。また、初出と単行本における本文異同を検討し、加筆修正によってもたらされた主人公の人物像の変容を捉えた。さらに、更なる死を促す不気味な存在のように見える「でんぼう爺い」は、実は主人公と暗黙の同意によって結ばれている人物であり、死者への供養を行ない、霊を弔うことで、死者を生者の空間へと甦らせる人物である、という新たな読みを示した。

「第3章 主題を生成する語り手と読者との相互作用」に注目して読解した「観徳亭」は、「鴉の死」の「でんぼう爺い」が主人公になっているためなのか、今までほとんど取り上げられることがなかった。しかし「観徳亭」は4・3蜂起の導火線となった1947年3月1日、3・1万歳運動記念集会における警察発砲事件が起きた場所であり、朝鮮王朝時代や植民地期、米軍政期、4・3の際に数多くの死者の記憶が刻まれた象徴的な場所である。本論文は本作を<異化の語り>、<異人としての「でんぼう爺い」>、<癩病患者>、<異様な光

景を撮る主体>のように「異」なるの「異」を手掛かりにして読み解いたものである。「観徳亭」前の広場は、人間や死の尊厳が埋もれている場所である。本作はその忘却の場所を、フィクションを通して再現し、「カメラ」に撮られた光景、すなわち生き残った者の眼に焼きついたはずの、死者一人ひとりの記憶を掘り起こし、責任主体を追及する物語であることを明らかにした。

1957年、1962年に書かれた第1部の済州島三部作は、4・3の当事者ではない金石範が、4・3が韓国の歴史として位置づけられていないばかりか、それに対する資料も皆無だった時期に書いたものである。この済州島三部作は、歴史として書かれていない、国家権力によって忘却させられた出来事に向き合う文学のあり方を示したのものとして評価することができる。また、朝鮮半島と日本列島の歴史的時空間を行き来する「日本語」をもって4・3の死者一人ひとりの記憶を掘り起こし、弔うと同時に、繰り返しその責任主体を追及する金石範文学の核心が凝縮されている作品群として位置付けることができる。

「第2部 金石範の「日本語」が生み出す人間像を問う」では、1960年から1970年にかけて発表された「糞と自由と」「虚夢譚」「万徳幽霊奇譚」を分析対象とし、作中人物の人物像を形象化する「日本語」の特徴に焦点を当て、主人公と物語世界に秘めた作者の企図を考察した。

まず、「第4章 知識青年の「敗北」と「糞まみれの自由」の意味」についての考察を試みた「糞と自由と」は、植民地期の北海道における朝鮮人徴用工を描いた小説である。主人公は知識青年として優越意識をもっていますが、朝鮮人が朝鮮人に「死の鞭を加え」ないと、身の安泰が得られない場面で、権力に迎合し仲間に死の鞭を加える。そこで、最後までそれを拒否した龍白という白痴のような人物に敗北を味わう。金石範は本作を通して、主体の忘却と屈従から主体性を取り戻すことへの欲望こそ身体と精神の「自由」であり、「糞まみれ」になっても徹底的に「自由」を貫徹すべきであることを訴えている。また、金石範は様々な朝鮮人を形象化すると同時に、日本人幹部、特高警察、京城帝国大学の日本人教授、引率の日本人、踏絵の過去をもつ日本人といった日本の歴史における様々な括りの日本人をテキストに登場させ、死者になった朝鮮人労働者の記憶を蘇らせることを越え、植民者としての日本人の経験と責任をも小説テキストを通して歴史化しようとしたと言える。

続いて、第5章では、在日朝鮮人「私」の想起の連鎖と、その意味を考えることで「虚夢譚」の読解を試みた。金石範は、1969年、7年ぶりに日本語による創作の世界に回帰し、「虚夢譚」を書き上げた。胃の手術を受け、通院している在日朝鮮人「私」が想起する三つの場面を考察した。それは、「やどかり」に「はらわた」を食われ、空を飛んで朝鮮半島に渡って洪吉童に出会う昨夜の夢、そして1945年8月15日の正午、市電の中で日本人と思われる美しい女性に触発されて涙を流した場面、最後に、日本人の友人であり朝鮮育ちのジャーナリストFとの故郷をめぐる口論の場面である。本作は、「私」の言葉、8・15、故郷に対する観念から在日朝鮮人の錯綜するアイデンティティが垣間見られると同時に、言語や考え方などで民族としての純粋性、すなわち、本物／偽物を判断してしまうという極めて単純な言説に異議申し立てを示す物語として読むことができる。また、植民地主義が遺したことを

考える際、どちらにも偏らず両者の痛みに目を配る観点が求められる、ということ、本作の読みを通して導き出すことができた。

「第6章 格闘することばの世界」としての「万徳幽霊奇譚」は「虚夢譚」発表の1年後、「糞と自由と」の龍白という人物と同一人物と見做される万徳が生きる4・3の時空間を描いた小説で、1971年上半期芥川賞にノミネートされた作品です。日本語で朝鮮が書けるか、日本語で書いても朝鮮人としての主体性が保たれるのか、と自問自答しながら言語論を書いていた時期と重なり、本作の冒頭は「くどい」という選評が出るほど、繰り返し主人公・万徳の様々な呼び名を語り直す。そこで日本語と朝鮮語との混在性を見出し、とりわけ両言語の基底をなす漢字語と固有語を緻密に織り成す操作を金石範独特の「翻訳」行為として捉えた。また、本作で描かれる非人間的なアカ狩りは、植民地支配下の朝鮮人狩りを学習した暴力の重層、つまり植民地主義の継続を生きているということのパラドックスとして時空間を変転させながら、人間としての倫理性の貫徹を見せる万徳という人間を通して見事に提示している。

金石範の「日本語」によって産み出される人物たちは、生きた時空間や置かれている状況がそれぞれ異なる。しかし、彼らに共通しているのは、日本帝国の植民地支配が生み出した不幸に影響されていることである。金石範文学を読む読者の今、そして第2部の作品が書かれた1960年から1970年を振り返ると、自ずと日韓基本条約をめぐる諸問題が浮かび上がってくる。

第3部「書くことの原点を問う—なぜ書かねばならなかったのか」では、金石範の自伝的要素が濃厚な作品群—『1945年夏』『遺された記憶』『乳房のない女』—の考察を通して、金石範の書くことの原点は8・15と4・3であることを導き出した。

「第7章 主人公・金泰造の主体的移動と流動し続ける自己」に着目し読み解いた『1945年夏』は金石範の自伝ともいえる作品である。とりわけ、在日朝鮮人青年・金泰造が日本列島と朝鮮半島とを主体的に移動する点に焦点を当てた。異界ともいえる祖国での経験やそこで流動する自己に対し自問自答する内面を読むことで、彼にとっての朝鮮／日本、朝鮮語／日本語、8・15の解放／敗戦の意味について考察した。「祖国は日本」という信念をもつ皇国少年だった主人公は「祖父の土地」としての故郷で朝鮮語に出会い、祖国＝朝鮮＝朝鮮語＝朝鮮人という四位一体の認識をもつようになる人物であるが、故郷での徴兵検査の時あらわれる、防衛機制としての日本語と日本人としての自己が齟齬をきたす様子を捉えた。また、彼が江原道という異界で出会う異言語としての「土着の朝鮮語」が彼の意識と身体を揺さぶる様子を捉えた。再び舞い戻った日本で迎えた8・15は主人公にとって自分の無知や限界の敗北であったからこそ、それは繰り返し自分の限界に向き合いつつ、問い続けなければならぬ課題になったことを読み解くことができた。

続いて、「第8章 読者の想像力に働きかける物語戦略」に注目し考察を試みた「遺された記憶」は、4・3という死と隣り合わせの時空から、生き延びるために海を渡った密航者の声（証言）を形象化した作品である。作中人物「私」と語り手の不一致という物語戦略にも注目した。生き残るために朝鮮半島の本土ではなく、かつての宗主国・日本に密航してき

た「私」と妻、息子、そして過去を隠し日本名で生きる大山。大山との遭遇から 11 年前の濟州島において目の前で見てしまった妻への拷問の場面を語る「私」であるが、物語の九割近くの時点で死んでしまう。その後、彼が書き残した日記を読んだ、息子に寄り添った語りで語られる物語になる。その突然の転調は、死者の声がどのように生者に語り継がれるかを示す装置であり、死者をして語らしめたことの表れであると捉えた。また、本作の作中人物は 4・3 に生み出された密航者であるという共通項がありますが、その裏腹には各々が思い起こされたことに対して語り得ることと語り得ないこととの間で揺れ動く格闘が存在していることを指摘した。何よりも妻・鄭英伊という女性が発する声における疼きや空白を捉え、それを想像し感ずること、それがまさに本作が指し示す核心であることを示した。

最後に第 3 部の第 9 章では、記憶を定位し直す語りの仕組みに焦点を当て「乳房のない女」を分析した。本作は、在日朝鮮人「私」が「S」という遠縁の親戚と過した約 10 年前の一夜と 30 余年前に密航してきた「S の母」と「K 女」という二人の女性と過した対馬での一夜を想起した後、2 年前から続く韓国の状況を振り返る中でもたらされる、疑問に対する答えを、かつての 4・3 の証言者から得るという三部構成の小説である。語り手「私」は、5・18 が引き金となり、4・3 にまつわる記憶の数々を想起している。また、語り手「私」は、過去を想起しつつ、その時空における自己の記憶を定位し直しているの、想起される様々な時点における「私」のことを強調する際は、〈想起される私〉と表現した。最後に、「看守朴書房」「遺された記憶」や雑誌『世界』などを引用する書き手としての側面が浮き彫りになる際は、〈地の文の叙述者としての私〉という表現を用いて分析した。そうした区分によって、本作は複数の位相をもつ「私」の声と、証言者の声とが、時制を越えた語り混じり合っている、多声的なテキストであることを明らかにすることができた。金石範は『火山島』第一部の連載を終えた時点で、1980 年 5 月 18 日の光州民主化運動の「いま」が引き金となり、自分の全存在を揺るがし、「小説」を書かせた原点となった出来事を「いま」の出来事として定位し直し、「看守朴書房」の「白いタオル」の女性に関する証言が語り継がれた過程を「S の母」と「K 女」といった女性たちの声で語らせると同時に、書き手として 4・3 を書き継ぐ意義と原動力を、「乳房のない女」という小説を通して形象化したのである。

第 3 部は、1945 年 8 月 15 日、1948 年 4 月 3 日、1980 年 5 月 18 日のような日付が思い起こさせる記憶を題材にした作品群をとりあげ、金石範文学の原点について考察を試みたものである。それらの作品を読むことで分かるのは、金石範は、常に自分の原点に立ち戻り、それについて言語化していた時点における自分を捉え直しつつ、更なる思惟の可能性を追い求める書き手である、ということだ。

第 4 部『『火山島』の世界を読み直す』では、1976 年から 1995 年まで 2 回にわたる長期連載を経て全 7 巻に完結した『火山島』を 3 章にかけて考察した。『火山島』は国連小総会において南朝鮮だけの単独選挙が決まった 1948 年 2 月 26 日から主人公・李芳根が自殺する 1949 年 6 月のある日まで、つまり約 1 年 4 ヶ月という短い時間を描いている。その小説内の時間は、4・3 蜂起が胎動し、武装隊の第 2 代司令官・李徳九が殺され、事実上壊滅に終わった時期と重なっている。

さて、「第 10 章 重層する語りの相互作用」では、まず、冒頭分析を通して、『火山島』の語り手は複数の位相をもつ表現主体として小説に登場し、語る視点を掌握せず、小説を読む方向性を示す存在であることを明らかにした。次に、同一対象を、対等に影響し合う二人の作中人物に寄り添った語りと、複数の声を紡ぐことで、少しずつ部分から全体像を組み立てようとする仕組みが『火山島』を支える語りの基本構造であることを捉えた上で、それを支えているのは緻密に構成された時間であることを指摘した。最後に、『火山島』は物語展開の軸である李芳根をして過去と今とを交差させる一方、南承之という対照的な存在をもう一つの軸にし、作中人物への距離を調節する、と同時に差異化させる、重層する語りの相互作用を生み出していることを解明した。

続いて「第 11 章 「自由」を追い求めていた主人公・李芳根の「自殺」」では、李芳根が追い求めている「自由」とは何か、という疑問を手掛かりにして『火山島』を読み直した。まず、何の抵抗もできないまま死を迎えねばならない状況での「殺意」をどう処理すべきなのか、という呉南柱の問いかけをめぐって、その問いを「繰り返し」思考し、それを「繰り返し」言語化し、それをもって「繰り返し」対話することこそ作者が企図した思想の自由であることを示した。次に、李芳根の「柳達鉉の死」をめぐる柳達鉉の亡霊の声との対話や梁俊午との「所有」と「自由」をめぐる討論からも思想の自由を追求する作者の企図を垣間見ることができた。また、「支配せず、支配されず」の「共産主義の未来像」こそ「自由」そのものであるという信念と「他者を支配せず、自分のなかに支配する必要のない権力、それを追求する必要のない自由」は今の現実において「夢」にすぎないという李芳根の認識には、ゲリラ組織と大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国など個人の個別性、何より思想と表現の自由を抑圧する組織や体制に対する作者の批判が秘められていることを指摘した。その上で、李芳根の「自殺」の動因をめぐって多面的な考察を行なった。目的の善悪を問わず「殺人」という暴力的な手段は正当化できないという認識、そして家族という「出生の条件」から「本質的に自由」ではない存在である点などを「自殺」の動因として検討した。最後に、李芳根の「自殺」は永遠に解くことのできない謎であるかもしれないが、大事なのは、『火山島』の読者が彼の「自殺」を「繰り返し」思考し、それを「繰り返し」言語化し、それをもって読者同士が「繰り返し」対話を積み重ねる過程、そしてその運動の継続であることを示すことができた。

最後に「第 12 章 歴史的時空間を越える物語の生命力」では、まず、『火山島』の本質は、物事の起源を問い続けることで、過去との対話を促す呼びかけと、歴史性の喚起と記憶、そして対話こそ「精神的な清算」のための基本であることを示した。次に、和信百貨店の創業者であり、反民族行為処罰法施行によって初めて検挙された朴興植という歴史上の人物の評価に対する価値判断の対立を挙げ、『火山島』が同一対象に対する価値判断の対立を描写するのは、今を生きる者の役目は何か、何が過去清算の「基本」であり、何が真の「解放」なのかを読者に問うためであることを明らかにした。また、「4・24 阪神教育闘争」が物語に語られる方法に注目した。カンパのための南承之と康蒙九の密航によって物語内で一つの主題として浮き彫りになった「阪神教育闘争」は、さらにそれを直接目撃した当事者たち

の声や文字によって全体像が浮かび上がる。複数の声から出来事の動因を描き、部分から全体像を組み立てようとする、『火山島』の語りの仕組みである。そして、日本社会において依然として朝鮮学校と民族教育に対する差別が存在し、それへのたたかいが続いていることを考えると、〈4・24〉という日付が浮かび上がらせる記憶は決して過去の歴史ではなく、今なお続いている当代の問題であることも指摘した。最後に、梁俊午との対話によって生成する、李芳根の思惟を描く地の文や発話を読み解くことで、『火山島』は、4・3のような極限状況を生きる人間とは何か、どのような生き方が善であるのか、はたしてその生き方の善悪、是非を問うことができるのか、と読者をかかわらせる物語であることを解明した。

以上のように、本論文は『鴉の死』から『火山島』までの金石範文学、つまり1957年から1997年までの40年にわたる金石範文学の読解を試みたものである。金石範という書き手の「日本語」は、日本語の表記における漢字やルビ、そして丸括弧を活用し、日本語という言語体系の約束事を異化するものであった。もちろん、そうした技法は金石範文学だけに見られる独自のものではない。日本語と朝鮮語／在日朝鮮人の日本語交じりの朝鮮語との拮抗から生まれた在日朝鮮人文学によく見られる現象である。しかし、金石範文学に見られるその異化作用は物語世界の歴史性に深くかかわるものとして機能している点において区別されるべきです。また、その金石範の表現における歴史性とは、8月15日（1945年／1948年）、4月3日（1948年）、4月24日（1948年、阪神教育闘争）、5月18日（1980年、光州民主化運動）といった日付が浮かび上がらせる歴史的時空間にかかわるものであったことも示した。

さらに終章では、金石範はフィクションの世界で、死者の声と生者の声を紡ぐ巫女となり、沈黙や忘却を強いる権力に抗い、語ることでできなかった死者をして語らしめ、生者をして押し殺しているものを語らしめる作家であることや、世界文学という観点から金石範文学の読み直しの可能性を提示したのである。